

2006年8月27日治療解説

27日の治療解説をまとめてみました。

関西中医鍼灸研究会 藤井正道

〒564-0041

大阪府吹田市泉町2-47-27-102 結(ゆい)針灸整骨院

TEL & FAX : 06-6380-2236

ホームページは <http://yuisuita.com>

1. 午前のシンポ

「中医学は、理論はいいが臨床はどうもいまひとつ」という評価があるようです。これはおかしい評価です。臨床での治療効果に結びつかないのなら、理論がいいとはいえません。中医学は日本の臨床に即した理論的発展がすすんでいないと捉えるのが正しいのではないのでしょうか。

日本の臨床で効果をあげるための、理論的発展が求められているのではないのでしょうか。もしも理論的裏づけがないけれど日本の臨床ではなかなか効くという治療のやり方があるならば、それは中医学的理論で分析する必要があります。分析して中医学的針灸の中に組み込めばいいと思います。そこに総合的な理論体系である中医学理論の優越性があります。もしも従来の理論的枠組みで捉えきれない事態が出現するならば、理論的枠組みを再構築する必要があります。理論的枠組みを再構築する必要を提起するのはだれでしょう。中国の文献の翻訳にたけた研究者や翻訳者学者の役割ではありません。先生たちは中国の素晴らしい文献をたくさん紹介してくださいました。実践から理論的枠組みの再構築のデッサンをだすのは、日本の臨床の実情に即した臨床家の務めです。私たちです。ちょっと違うなあ、これは実情に合わないとかぶつぶつ言いながら、日々患者さんに鍼をうっている私たちです。

荒削りでもいいと思います。臨床家が日本での中医学的針灸理論の発展に向けて様々な仮説を提起し、実践していく段階に至っていると思います。きちんとした絵に仕上げるのは著名な先生方をお願いするとしても、少なくともデッサンくらいは臨床家が書かなければなりません。私は関西中医針灸研究会でいろいろと議論してきました。その議論の様子や仮説は隔月刊の中医研通信に収録されています。

関西中医針灸研究会の仲間は荒削りなデッサンを議論しながら書いてきたと自負しています。

開業針灸師が臨床でよく遭遇するのは比較的軽症であり、軽症は風土や生活様式の影響を強く受けます。軽症をきちんと手早く治していく力が求められています。

中国北京と大阪とでは患者の傾向が違います。江戸の八百八町(ハッピークヤチョウ)に対し大阪は八百八橋(ハッピークヤバシ)と呼ばれました。

大阪に橋が多かったのです。それだけ川に囲まれ、湿度が高いのです。大阪の患者は湿邪がからむ場合が多くみられます。湿邪はしつこいなどと泣き言を言っている余裕は私達に

はありません。私が開業している吹田市泉町も2つの川に挟まれ、昔は田んぼだったところが宅地に変わっているところです。

ここにいる多くの皆さんがご存知の李世珍先生の配穴を例にあげてみます。李世珍先生は78年に中国援外医療隊に参加して、エチオピアに行ったことをのぞけばずっと河南省で生活し臨床されているわけです。河南省は黄河の流れる乾燥した地域です。古代の首都洛陽もあります。

湿度の高い大阪とはぜんぜん違います。李世珍先生にとっての「世界」は河南省です。私の世界は大阪です。

李世珍先生が行かれた唯一の海外、エチオピアでの治療例も常用輸穴臨床發揮、東洋学術出版社の臨床経穴学に載っています。エチオピアの気候風土を調べてみると、雨季乾季がありますが、日本のように湿度が高いとはいえない環境のようです。高原地帯です。

人は自分の臨床環境の中でものごとを認識し、その環境の中で効く治療をつくっていきま。10数年前初めて著作に接した頃と違い、今は李世珍先生の配穴を、それだけでそのまま使うことはあまりありません。10数年前は一生懸命手技をして、そのままの配穴を使っていました。今はひとひねりしています。去湿や温陽化湿のやり方を強め、化熱化火を李世珍先生ほどには警戒せず瀉法は多くの場合平補平瀉にとどめ補法は温陽など灸の補法をもって替えられるならばできるだけそうして、やっていくという具合になっています。化熱化火を李世珍先生ほどには警戒せずというのは、湿邪が陽を阻むと考えるからです。海に囲まれた地形。食べ物からくる内湿の問題、寒冷な食品を多くとる日本の食生活。陽気を補う季節の夏に、エアコンを使い陽気不足に陥るといったこともあるでしょう。大阪の患者は北京や洛陽ほどには化熱化火しません。瀉法は多くの場合平補平瀉にとどめというのは、湿邪が陽を阻みますから瀉熱の必要はおのずからへっていくと考えるからです。例えば東洋学術出版社の臨床経穴学365ページの肝俞の使用例で肝血虚からの虚勞の治療をみてみます。本病は五臓虚損、気血、陰陽不足の病証とされています。症状は眩暈耳鳴り。驚きやすい。舌質淡弦細などとなっています。目の疲れを伴うこともおおいでしょう。

配穴は肝俞 膈俞 三陰交(補法)となっています。肝血の補養です。

私なら中枢 大椎に灸頭針 四神聰留針としながら、肝俞 膈俞を使い、すべてを抜針した後に三陰交と神闕の灸といった具合です。神闕の灸で温陽化湿します。督脈任脈を使いますから陰陽も調和します。

督脈を通し清陽をあげたほうが眩暈をとめるのは早いです。熱が滞留することを心配する方が中医派には多いのですが、経気を通せば問題ありません。眩暈といえば、弁証関係なく百会に透熱灸している鍼灸師は現代の日本にたくさんいます。たいていはうまくいっています。まずその事実から出発すべきでしょう。

中枢で健脾も図れます。気をめぐらした後、三陰交で降気しておけば問題ありません。

肝血はすぐには補えません。血は脾胃で食物が吸収されて、それから血になります。鍼をしてもすぐに血は増えません。四神聰で頭顔面部の経気を通すことで局所的に不足している場所に気血を送り、肝血虚の症状は改善できます。1回でそれなりの治療効果をあげられます。百会でもいいです。実際の肝血虚の治療はしばらくかかりますが、患者さんは早

くよくなりたいたいのです。すぐに眩暈をとめたり、目の疲れを取るには四神聡を入れます。太陽もいいでしょう。去風と通絡を考えて風池をいれるのもいいでしょう。針数をそこそこ使っても、清陽をきちんと上らせて頭を通絡したり、神闕で補気補陽していれば、理気過剰で瀉法に働いてしまうのではないかと心配することはありません。私は少数穴で治療するときもあるし、たくさんつかうこともある。2 番をつかうこともあれば 30 番をつかうこともある。こだわらないのですが、結構使ったときでも、瀉法に働いて患者さんがしんどくなったという経験は、まずありません。これは灸法を多用しはじめてからの話です。

脈舌については湿邪がからみますから弦細よりは弦滑となる場合が多いようです。おまえが言っているのは肝血虚からの虚勞ではなく痰濁の眩暈のことじゃないかという声が出てきてもおかしくないようなことを私はしゃべっています。肝血虚に湿邪をはらむからどうしても中間型のような形になります。中間型の方が大阪の実際の臨床で多くみられるのなら、肝血虚よりも肝血虚に湿邪をはらむ場合の対処法 配穴を考えたほうが有効です。中医学初心者は、その辺がわからないので大きくつまづくことが多いように感じています。中国で使いやすい分類から日本で使いやすい分類に変えていく作業が必要です。この場のみなさんでやっていきましょう。

痰濁の眩暈の配穴はたとえば鍼灸学臨床篇 275 ページをみると、中 内関 豊隆 陰陵泉 頭維となっています。陽明の痰熱を頭維で清熱するといいますが、大阪では熱はそれほどないので通絡でいいでしょう。そうすると瀉法ではなく平補平瀉です。やっぱり四神聡や督脈を入れたほうが効果的です。化熱が心配なときには私は電針にしています。強い通絡は少し瀉熱にも働くと考えています。それでも心配な時はどっかで瀉血しておけばいいでしょう。

臨床経穴学 369 ページには誤灸、誤って灸することの弊害として「肝病には陽亢の証候が多く見られる、誤って肝兪や胆兪に灸を施すと肝火上衝をひきおこしやすい。これによって肝火が頭部に上りう眩暈、頭痛、頭の張る感じ、耳鳴りをなどの症状が出現する。これらの症状が出現した場合は行間を瀉して肝火の清降を図るとよい。」と書かれています。私が大阪的に言い換えると次のようになります。湿邪をもつ場合は多いので、灸で去湿するのは効果的です。肝火があがることはあまりありませんが、化熱化火が心配なときは行間や太衝に平補平瀉して降気を図っておくといいでしょうと。こういう調子で昼からの患者さんも診ていきます。

2. 午後 実技披露と臨床

神経性嘔吐の患者さん。20 代男性 身長 172 センチ 体重 5 2 キロ

東洋学術出版の鍼灸学臨床篇の 146 ページに嘔吐について分類されています。

飲食停滞による嘔吐

肝気犯胃による嘔吐

情志失調により肝鬱となり、それが横逆して犯胃となり、胃気が和降できなくなって上逆

すると嘔吐がおこる。

主症 嘔吐 吞酸 頻繁にあい気がおこる。

随伴症状 胸脇脹痛 煩悶 情緒変動による嘔吐の発作または増強

肝気がのびやかに動かず鬱するため

舌苔 薄膩 脈弦 氣滞肝(火)旺の現象

脾胃虚弱による嘔吐

平素から脾胃虚弱であったり、働きすぎて運化機能が低下して水穀が停滞し、胃気が上逆すると嘔吐がおこる。

主症 少し多く食べると嘔吐する。

脾胃虚弱、中陽不振であると水穀を腐熟、運化する力が弱いのでおこる。

随伴症状 顔色萎黄 食欲減退 腹脹 大便溏薄 脾虚のため運化機能が低下しておこる。

四肢倦怠 乏力 脾は四肢をつかさどっており脾虚になるとおこる。気血が四肢にいきわたらない。

舌淡 苔は薄白 脈濡弱

病因病機は胃気上逆 治法は 降逆和胃止嘔

処方例 中かん 足三里 内関 公孫

飲食停滞には下かん 肝気犯胃には太衝 脾胃虚弱には脾兪 脾兪は直刺補法 健脾温中をはかる。灸頭針を用いてもいい。

以上

カルテ記載によると

主訴は嘔吐 西医診断は原因不明

現病歴は 10年ほど前から突発的な吐き気を感じるようになった。はじめのうちは運動をするとき緊張したときなど誘因がはっきりしていたが、最近はやべる時、食事のときなど些細なことでも吐き気を感じる。吐き気は咳を伴い唾や痰、胃の内容物を吐いてしまうこともある。一度 吐くと楽になる。

Q.どのくらいの頻度で吐くのですか。

A,一番ひどいときは毎日、朝起きると。最近3日に1回程度。

Q. 眠りすぎると書かれていますが、どれくらい眠りますか。いつごろ寝ていつごろ起きますか。

A,午前0時に寝て6時ごろおきる。日曜は1日寝ている。

嗜眠ですね。清陽がきちんと上がっていない。

常に頭が重い。眩暈、眩暈は吐き気のあるときに伴う。

常に頭が重いのは清陽がきちんとめぐっていないから、吐き気とともにくる眩暈は上逆から肝陽上亢のようなものですね。でもがらがら、ずきずきするような頭痛はなく虚熱の勢いは弱いですね。

Q. 甘いものは好きですか。

A. 好きです。

脾気虚あるから甘いものすきなんでしょう

目がよくかすむ。これも気血によって目がきちんと滋養されていないから。

口はいつも渴いてねばねばしている。熱があるのかもしれないし、唾液の分泌がよくないのかもしれない。望診脈舌から熱のせいではないと判断しました。

背中 顔 頭に吹き出物が多い。10年前から。胃経の湿熱からでしょう。背中の吹き出物は今は少ないですね。

吐き気あるときは後頸部 肩部が締め付けられるように痛む。肝鬱気滞ですね。

肩は右のこりが強いとのこと。やはり肝鬱がらみですね。

下痢が多い。脾気虚からの可能性が高いですが、肝鬱からも下痢は起こります。

暑がり、のぼせやすい。とカルテ記載。

Q. のぼせますか。

A. ぼおっとしているからのぼせているのだろうと周りから言われます。

これはのぼせではないですね。

冷え性のところにまるはしてあるが、冷えは感じないと、書かれています。

足先は黄色で、触ってみてやや冷たいが、それほどでもない。交感神経緊張気味の方は抹消の血液循環が悪くなるから、冷たくなります。気滞です。

たぶんこの患者さんは暑くなると、身体も熱く、たぶん上部中心に熱くなり、寒くなると冷える可能形があります。体温調整がうまくいかない。寒熱往来です。少陽証です。少陽経のとおりがよくないです。

舌 胖大 淡やや紅暗 中央にくぼみ 舌に震えあり

舌の上焦の一部から中焦部分にかけてくぼんでいます。肺も脾胃も弱っていることを示します。舌の震えは気虚からでしょう。

苔は薄苔

これは昼食直後ということをつっかり忘れていました。いつもはどんな状態か患者さんに聞くべきでした。胃気の弱い患者さんでしたから、苔が無根の可能性が大きいのです。苔が無根、しっかりと舌についていない場合ははがれやすいのです。

脈 右はやや滑やや弱 やや滑 やや滑

寸関尺は肺 脾 腎(命門)として

気虚あるから寸口は弱 痰湿あるから滑 気虚のため滑といってもころころした感じが弱まっているため、やや滑といった状態

左は 寸関尺全体にやや滑やや弦

寸関尺は心 肝 腎として

肝気鬱滞があるためかわずかに肝である関部分 中心に少し弦がでているが、はりつめ方は弱い。

いずれにせよモデル患者、初診という状況では患者の緊張もあり、だいたいの脈しかわからない。

どうやって治していくか。

強引あてはめれば、肝気犯胃による嘔吐とまずは考えられますが、では

処方例 中かん 足三里 内関 公孫

に肝気犯胃には太衝という配穴でもいい。

ただこれで治るでしょうか。

Q. こういう感じの配穴はいままで使ってきたのではないのでしょうか。

A. 同じような配穴で長期間 治療したが「悪くならなかった」という状態で改善せず。

いつも眠い 嗜眠というところに着目し、脾胃虚弱に焦点をあてるという考えもできます。

処方例 中かん 足三里 内関 公孫

脾胃虚弱には脾俞ということで脾俞の灸頭針あたりを使うという手もあります。

当初は肝気犯胃であるが長期間 吐いているため今は脾胃虚弱となっている。気虚兼気滯です。少し疏肝して、しかる後健脾胃していくというのがオーソドックスな考え方です。

中医派は上逆を警戒しますから、疏肝理気と健脾胃の間でのバランス調整に苦労することになります。嗜眠とか頭がぼおっとするということになると百会ですが、脾胃虚弱中心となると胃経の湿熱の説明がむずかしくなってくる。肝陽上亢ありとなると百会瀉法となるが、これでは嗜眠の治療としてはおかしい。

実際は湿邪が陽を阻み、上亢の勢いがないので、脾胃虚弱に着目して治療しておいた方がまだましでしょう。疏肝理気平肝潜陽では陽気の通絡が不十分で湿邪がとれず、経絡が通りません。

下手に熱を瀉すと陽気がうまくめぐらなくなり、湿邪がとれず経絡が通りません。臨床的には、疏肝理気平肝潜陽では治療直後はちょっと頭がすっきりしたが、すぐにまたもどってしまったというふうになります。治療効果が続きません。

ただし脾胃虚弱とはいっても3食 ふつうに食べている。ちょっと食べるとおなかがはるというほどでもない。脈もそれほど弱くはない。ひどい脾胃虚弱でもないのに10年 治らないというのも変な話です。臓腑弁証だけでは治療ににくいと考えます。

疏肝理気や平肝潜陽の治療だけでは、頭重いかかすむとかいった状態は改善しないでしょう。健脾だけでは吐き気やめまいは改善しません。

湿邪が陽気を阻み、上亢に勢いがないと考えると、督脈を通し 頭に清陽をあげ、気の推進力をつけながら任脈を通すといったやり方が考えられます。胃経 衝脈 陰きょう脈も

とおします。

弁証は督陽障害 胃経の湿熱 痰湿による経絡不通でもよいです。

現代医学的には広義のうつ状態に近い状態と捉えてもまちがいでないでしょう。

本当の陽気不足ではないけれど、湿邪が経絡の気を通さないため、陽気不足のような症状がみえる。眠りすぎる、頭が重い、目がかすむなど。督脈の気がきちんとおぼっていないから、任脈も胃経も奇経も通らず、上逆しやすくなる。奇経の中でも、陰きょう脈と衝脈のとおりがわるい。陰陽不和ともいえます。

督脈の陽気がしっかりとおっていないから 任脈が通じないと考えます。

吹き出物は湿熱です。

吹き出物はこの場合、熱を瀉するのではなく、湿邪をとって治します。通陽との関係で 一時的に吹き出物がひどくなることもあるかもしれませんが、もっと通陽すれば湿邪がなくなり、吹き出物はなくなります。私は臨床でよく経験しています。風寒の風邪をひかれた時は治療の好機です。清熱ではなく通陽発散してなおしていくと、吹き出物はなおしていきます。

胃気上逆を治すために 胃経のつぼを使います。陰陽の調整をかねて顔面部の胃経のつぼをつかうという手もあります。また痰湿が経絡を阻んでいるので去痰のために胃経のつぼも使います。

参考

この患者さんのことではありませんが、督脈を通陽するとイライラしていた患者さんもリラックスして眠くなります。実際に眠る患者さんもいらっしゃいます。

最初は眠らなくても 3 回目 4 回目あたりでは眠くなります。こうなると効いてきたなという感じになります。症状もとれていきます。

陽気を通すと目が覚めるようなイメージがあると思いますが、治療中は一般に眠くなります。これは陰陽が調和するからです。

治則 昇陽健脳去痰去湿 通経活絡 温陽化湿

督脈を温通し、任脈 胃経 衝脈 陰きょう脈を通します。

命門 中枢 棒灸 督脈通陽

大椎の右側に灸頭針 通陽理気降逆

大椎の右上の夾脊に針 これは阿是穴です。

四神聡 健脳通絡作用
百会 昇陽通絡 健脳
このあと

迎香 手の陽明大腸経 足陽明との交会穴 散風清熱の作用あるが2番で平補平瀉するだけだから通絡と考える。

地倉 手足の陽明 任脈 陽きょう脈の交会穴 通絡

承漿 任脈だが 手足陽明 督脈任脈の交会穴 人中に代わり陰陽調和のつぼとして使いやすい。通絡 陰陽調和

廉泉 陰維脈 任脈の交会穴 唾液の分泌をうながす。

だん中 理気降逆 気会 手厥陰心包経募穴 足太陰少陰手太陽少陽任脈の交会穴

内関 寧心安神 理気和胃 心包経の絡穴 別支が手の少陽三焦経に通じる。八脈交会穴の1つで陰維脈に通じる

陰維脈は足三陰経が交会するところよりおこり下肢内側に沿って上へ腹部で足太陰脾経と同行、脇で足厥陰肝経と合し咽喉に至り任脈と出会う。全身の陰脈を連絡させている。築竇から上に行き、府舎 大横 腹哀 期門 天突 廉泉につながる。

公孫 加える棒灸 温陽降逆 公孫(衝脈) - 内関(陰維脈)で陰維脈と衝脈を通じさせます。公孫は衝脈に通じていて、衝脈がつまれば上逆します。

列缺灸 列缺(任脈) - 照海(陰? 脈)で任脈と陰? 脈をつうじさせます。27日の治療では照海は使いませんでしたか、この患者さんの治療には時々 使えばいいと思います。

陰きょう脈 陽きょう脈は神志病 心身症につかうとされています。

陰きょう脈に病変が発生すると肢体の外側が弛緩し内側が拘急、引きつります。陽が弛緩するので眠りやすくなります。陽きょう脈では逆です。ここでは陰きょう脈のとおりがわるいことがうかがえます。

陰きょう脈は足少陰腎経の然谷、照海、交信から、胃経の乳中、缺盆、人迎に行きます。

咽喉を通り、鼻の横を行き、晴明から脳に入ります。これが陰きょう脈の流れです。

照海や交信は腎経です。次は陽の乳中から人迎に胃経を通っています。

足三里灸 健脾養胃 補修益気

中かん 加える生姜パック 理気และ胃降逆 神関付近の温パック、足三里灸を加えているので温陽益脾の効用もある。

膈俞 あおむけ状態で生姜パック 久病のため気滞からお血が疑われる。舌も暗。そのためもあり血会をとる。また和胃寛胸の働きもある。また神経衰弱、虚勞に四華穴、膈俞胆俞をつかうことから膈俞をもちいた。

今回はつかっていませんが胃経でもある気衝を使うのも面白いかもしれません。「衝脈なるもの気衝におこり」ということになっています。気衝に横刺し温パックをおきます。

鍼はすべて平補平瀉です。

奇経については関西中医研は以下のように考えています。

邵中医師の見解 **【久病入絡】**

「葉天士は『慢性病は絡に入る(久病入絡)^{きゅうびょうにゅうらく}』理論をとえました。長期の病気は気血に影響し、絡に影響します。絡とは気血を集めているところであり、奇経八脈です。絡は？血になります。奇経とはダムのようなものです。気血のダムで貯めるところです。また、絡と絡をつなぐところ。絡と絡をつなぐので？血は出やすいです。

この葉天士の理論が出たのには、時代背景もあります。『傷寒論』の頃の中国と温病学説の頃の中国では、食生活など生活条件も違いますし、住んでいるところも違います。『傷寒論』の頃はいわゆる中原が文化の中心ですが、温病学説の頃は、北方異民族の圧迫や南方の開発が進んだことなどで蒸し暑いところにも住んでいます。気候条件も食生活も治療を受ける階層も変わっています。そして、環境が変わって、新しい病気が現われ、いままでの治療法で治らなくなったら新しい学説を出すというのが中医学の伝統です。日本人は、脾胃が弱いです。中国と同じように日本人が食べたら、お腹をこわします。胃腸の状態が全く違います。胃の弱い人種が高度経済成長とともに肉食や油料理を食べるようになり、さらに環境ホルモンなどの問題があり、人体が変化してきているという認識があります。

『傷寒論』の時代には、経絡病がすぐに臓腑に影響しました。しかし、後世になると栄養状態も改善され、経絡病がすぐに臓腑には入らなくなりました。その代わり、絡など、もっと細かいところ、つながっているところの病気が増えました。例えば、現代人の血液はドロドロで、脂肪やコレステロールが問題になっています。これは食べものからの湿邪です。また気虚からも影響します。現代人は運動不足で肺も弱いです。クーラーなど環境の影響から冷えている人も多いです。この冷えから督脈の陽気不足があります。

督脈の灸、列缺 - 照海、任脈の？中など奇経八脈を使うことになります。陰？脈・陽？脈などの奇経八脈はうつ病と関連しています。古典では陰？脈・陽？脈の病は癩癧などです。これは陰陽の失調です。陰？脈・陽？脈・陰維脈・陽維脈などの奇経にエネルギーを提供しているのは督脈と任脈です。

奇経八脈に通じる八脈交会穴として、後谿(督脈) - 申脈(陽？脈)、公孫(衝脈) - 内関(陰維脈)、列缺(任脈) - 照海(陰？脈)などがあります。

公孫 - 内関は利湿の作用があります。また、胃腸病、理気、精神病などに使われます。理気とありますが、この理気は肝鬱気滞の疏肝理気とは違います。公孫 - 内関の理気は奇経を通すことで経絡を通して細かい絡を通じさせて気滞がとれます。

邵中医師の見解以上

参考 顔面部のつぼとしては

睛明 太陽膀胱経だが、手足の太陽、足の陽明の交会穴、これに陰? 脈 陽? 脈を加える説もある。私は睛明の代わりに攢竹を使用。

承泣は陽きょう脈 任脈 足陽明の交会穴 私は四白を代わりに使用することが多い。

頭維 足少陽 陽維脈の交会穴

参考 督脈通陽法の紹介

督脈の特徴は、

督脈は「陽の海」であり、陽気の源流です。

督脈は奇経八脈の一つです。

「陰の海」である任脈と前後で全身の気をめぐらせるような働きをします。

督脈は陽のエネルギー - の海であり、他の十二経に陽のエネルギー - を送ります。

督脈の通陽法は棒灸や紙筒灸、灸頭針を使いますが、使い方によって温陽と通陽の程度がかわるので目的に応じて使い分けます。

例えば温陽に重点をおくときは棒灸で、通陽に重点をおくときは灸頭針でといった具合です。局所に気滞のあるときは華佗夾脊穴や阿是穴を適時組み合わせます。

治則によっても加減します。例えば健脾を考えて中枢を入れる。といった具合です。

今後の展望

10年以上続く嘔吐であるが、週2回 一ヶ月程度で、現在「3日に1度程度」の嘔吐は週1回、ないしは治療2から3回目から出なくなる可能性が見込めます。弁証は督陽障害 胃経の湿熱 痰湿による経絡不通とし、現代医学的には広義のうつ状態に近い状態と捉えられます。

私は今回のような10年以上続く嘔吐の治療経験はありませんが、広義のうつ状態を治してきた治療経験から推測できます。2ヶ月もあればいったんの治癒に持ち込めるでしょう。なにより頭がぼおとしていつも眠い状態は1ヶ月でなくなるでしょう。集中力が回復します。私は確実にぐいぐい治る鍼灸を実践しているつもりです。

自宅でも毎日お灸してください。

1組 中枢 至陽 大椎 だん中 中かん

2組 内関 足三里 天枢 右太衝 左公孫

として交互にやってみてはどうでしょう。

今回の患者さんは鍼灸の関係者のようすし、私の治療はそう特別の手技がなくても効果があがるようになっていきますから是非 周りの協力で治療を継続していただきたいと希望します。

中医学はすばらしい学問ですが、過熱化火を警戒しすぎ湿邪、痰湿の変化を動的に捉えることがうまくいっていないために日本での発展が今一步のように感じられます。督脈通陽法は鍼灸の効果を高める触媒のようなものですから、どんどん使ってみてください。臨床例を発表してください。途上国型の中医鍼灸を工業先進国型に発展させましょう。